
18 世紀後半のオーストリアにおける文章語の標準化 をめぐって*

—マリア・テレジアの学校改革がもたらしたもの

鯨岡 さつき

1. はじめに

ドイツ語圏においては 16 世紀から 18 世紀にかけて、統一的な新高ドイツ文章語 (Schriftsprache) の地位をめぐり二つの言語変種 (Sprachvarietät) が競合していた。一つは「東中部ドイツ文筆語 (Schreibsprache)」で、もう一つは「上部ドイツ文筆語」である¹⁾。本論文においては、まず第 2 章で 16 世紀から 18 世紀にかけてのオーストリアにおける上部ドイツ文筆語の歴史を概観し、第 3 章では上部ドイツ語文筆語の言語的特徴のあらましを述べたあと、第 4 章ではとくに 18 世紀後半に焦点を当てながら、2 つの項目に関してオーストリアにおける上部ドイツ文筆語の変化を実証的に調査する。第 5 章では、まさに 18 世紀後半にオーストリアで学校改革が行われたことを踏まえ、第 4 章で確認できた言語的变化が学校改革という社会文化史的变化との間になんらかの関連性を認め得るかどうかをめぐって考察を行う。

2. 16～18 世紀のオーストリアにおける文筆語

神聖ローマ皇帝マクシミリアン 1 世 (在位: 1493-1519 年) の官房語に基盤を置く上部ドイツ文筆語は、新高ドイツ文章語の発展に対する影響力を 16 世紀前半に弱めることとなった。それは、東中部ドイツ文筆語がルターの宗教改革によって力を得たためである (Wiesinger 2014³⁾: 10、Rössler 2005: 16 参照)。その後、オー

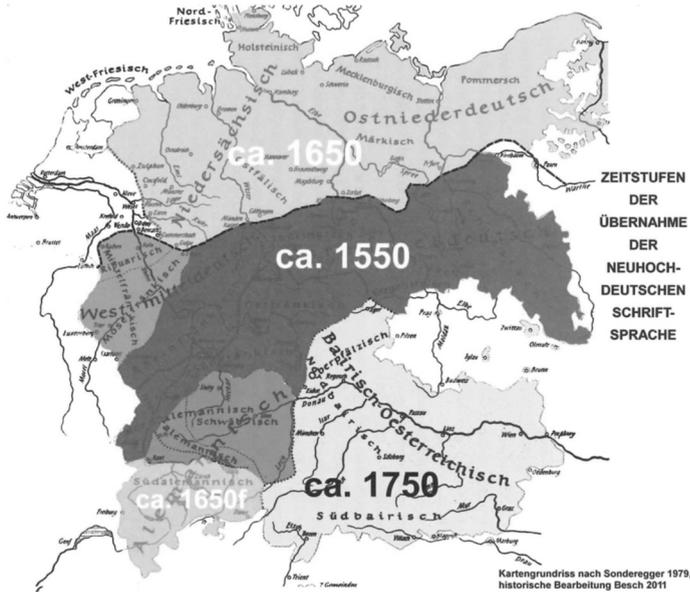
* 本論文は、平成 30 年度日本学術振興会「若手研究者海外挑戦プログラム」(研究課題名: 「18・19 世紀のオーストリアにおける言語的標準化—言語実態と言語意識の観点から」) の助成による研究成果を一部含むものである。ここに記し、謝意を表す。

1) ドイツ語圏全域に通用する統一的な書きことばを「文章語 (Schriftsprache)」と呼び、その段階に到達していない書きことばを「文筆語 (Schreibsprache)」と呼ぶ。

ストリアおよびバイエルンにおいて16世紀半ば以降に反宗教改革の動きが顕著となった。オーストリア中部のシュタイアーマルク、南部のケルンテンでは、オーストリア大公のカール（在位：1564-1590年）が、イエズス会の運営により書物の検閲などを行った。またオーストリア北部のニーダーエスターライヒ、オーバーエスターライヒでは、オーストリア大公のエルンスト（在位：1576-1590年）が招聘したメルヒオル・クレースル（Melchior Khlesl, 1552-1630年）が、この地域のプロテスタントの教会を閉鎖し、プロテスタント教徒から市民権を剥奪した（Wiesinger 2003: 2979 参照）。その結果として17世紀初めに、この地域の大部分が再びカトリック化した（Rössler 2005: 16 参照）のに伴い、文筆語として再び上部ドイツの「方言的特徴に強く依拠するようになった」（Wiesinger 2003: 2982）。しかし最終的には、図1が示すように、低地ドイツでは17世紀中葉までに完了していた東中部ドイツ語型の文筆語の受け入れが、上部ドイツでも18世紀中葉までに完了した。つまり、紆余曲折を経ながらも、上部ドイツにおいて東中部ドイツ語的な異形（Variante）の使用が16世紀以降の時間の経過の中で徐々にしかし確実に進行し、「18世紀中頃に、最後の地域として（東）上部ドイツがこの新しい言語型式（Sprachtyp）に従った」（Besch 2012: 39）のである。ここでいう「新しい言語型式」とは、東中部ドイツ型の新高ドイツ文章語のことである。このようにして、東中部ドイツ語型の文章語の受け入れの完了によって、言語的競合ないし分裂は、「オーストリアでは1750年に […] 終結し」（Wiesinger 2014³: 310）た。本稿で「標準化」と呼ぶものは、この受け入れのことを指す。

オーストリアにおける文筆語の標準化を扱う先行研究としては、とりわけWiesinger (2014³) と Rössler (2005) を挙げるができる。Peter Wiesinger はウィーン大学教授として、オーストリアにおけるドイツ語史に関する研究を長年牽引してきた。Wiesinger は、1765年から1773年に出版された説教集を言語データとした実証的研究を行った。そしてWiesingerの研究に続き、さらなるオーストリアの文章語の「標準化」に関する実証的研究が行われた。Wiesingerの教え子のひとりであるPaul Rösslerは、1530年から1765年までの印刷された宗教テキストおよび実用テキスト計87を言語データとして、24の項目（異形のペア）に関して数値を数え上げて、Wien, Graz, Klagenfurt, Salzburg, Linz, Innsbruck, München, Passau という計8つの上部ドイツ語圏の都市における文章語の標準化に関する実

図 1 : (東中部ドイツ語型の) 新高ドイツ文章語の受け入れ完了時期
(Besch 2012: 36)



態を調査した (Rössler 2005)²⁾。Rössler (2005) によれば、24 の調査項目のうち 7 つの項目 ((1) *ei* か *ai* か、(3) *u*, *ü* か *uo*, *üe* か、(12) *ihm* か *ihme* か、(13) *dem* か *deme* か、(17) 最上級の変化語尾が *-est* か *-st* か、(19) 過去分詞に接頭辞 *ge* が付くか付かないか、(23) *sehen* の直説法過去が *sahe* か *sah* か)³⁾ に関して、再カトリック化した 1630 年の印刷物においては、上部ドイツ文筆語の特徴が 1600 年と比べて急激に増えていることを報告している (Rössler 2005: 358-359 参照)。

3. 上部ドイツ文筆語の特徴

上部ドイツ文筆語には、どのような特徴があったのかについて概観しておこう。ここでは Wiesinger (2000)、Reiffenstein (2003a)、Reiffenstein (2003b)、Rössler (2005) の記述内容に基づいて上部ドイツ文筆語の特徴を総括的に述べていく。

2) 調査対象とされた 24 の項目の詳細については、第 3 章で上部ドイツ語の特徴を概観したあとで、一覧表の形で集約することとする。

3) これらの例では、それぞれ左側が東中部ドイツ語の異形、右側が上部ドイツ語の異形である。

3.1. 母音体系

Wiesinger (2000) は、上部ドイツ文筆語の母音の特徴について、主に3つを挙げている。まず非ウムラウト化であるが、これは *g, ck, r* が *u* の後ろにある時、あるいは子音 + *au* の後ろに *g, b, m* が続く時に *u, au* において起きた。例えば *zuruck, Lug, glaubig, versaumen* などのように、ウムラウトが起こらないのである。次に、上部ドイツ文筆語では、中高ドイツ語の *i* を *ei* で書き、*ei* を *ai* で書いて区別するなど、中高ドイツ語において区別して表記されていた母音が引き続き区別された。例えば *Zeit* (中高ドイツ語: *zît*) と *brait* (中高ドイツ語: *breite*) の書記上の区別がそうである。ただし、Rössler (2005) の調査によれば、この上部ドイツ語的な *ai* は、オーストリアおよびバイエルンの印刷言語において1530年の時点では東中部語形の *ei* を上回っていたのが、1690年の時点では上部ドイツ語的な *ai* がほぼ消滅した。*ei, ai* の他には、中高ドイツ語の *ie* を *ie (ye)* で、*i* を *i (y)* で、中高ドイツ語の *uo* を *ue, ū* を *u* で綴ることが上部ドイツ文筆語の特徴である。例えば *lieben* (中高ドイツ語: *lieben*)、*vil* (中高ドイツ語: *vîl*)、*genueg* (中高ドイツ語: *genuoc, gnuoc*)、*tugend* (中高ドイツ語: *tûgent, tûgende*) などが見られた。ただし、Rössler (2005) の調査では、*i* の使用に関しては1530年の時点では上部ドイツ語的な異形である *i* が東中部ドイツ語的な異形である *ie* を上回る状況だったが、1765年の時点では上部ドイツ語的な異形である *i* がほぼ消滅したことが確認されている。3つ目には、*u/ ü* から *o/ ö* への低舌母音化 (Senkung) が起こる環境下でありながら、鼻音の前にある *u/ ü* を保持したことも上部ドイツ文筆語の特徴である。例としては *sunst, möglich* などが見られる。ただし、Reiffenstein (2003a) によれば、早くも「15世紀末から、*n* の前の *u* において中部ドイツ語的な形の *o* への切り替えが始まっ」(Reiffenstein 2003a: 2925) ている。

3.2. 子音体系

子音体系においては、上部ドイツ文筆語に2つの大きな特徴が見られる。まず摩擦音において重子音が使われることがあった。例えば *schlaffen, auff* などが挙げられる。またそれ以外の *m, n, l* の場合でも拡大解釈により *nemmen, vnndt, zallen* などのように重子音が使われることがあった。二つ目に、*k, ck* が *kh, ckh* のように帯気音として書かれることがあった。*kh* の例としては、*khern* が挙げら

れる (Reiffenstein 2003b: 2949 参照)。ckh の例としては *gelenckh*、*marckh* などが挙げられる。なお Rössler (2005) の調査では、すでに 1530 年の時点で東中部ドイツ語的な異形である *k*、*ck* が上部ドイツ語的な異形である *kh*、*ckh* を上回っており、1600 年には東中部ドイツ語的な異形である *k*、*ck* がほぼ独占したということが確認されている。

3.3. 形態論

形態論に関わる上部ドイツ文筆語の特徴としてよく挙げられるのは、抽象名詞を形成する接尾辞と名詞における語末音 *e* の欠落である。

まず抽象名詞を形成する接尾辞の一つである *-nis* は、上部ドイツ文筆語において *-nus* と書かれた。例えば、*Gleichnus*、*Bildnus* が挙げられる。次に、名詞の語末音 *e* の欠落 (Apokope) は、強変化男性および中性名詞の単数 3 格形 (*an dem Tag(e)*、*dem Kind(e)*)、複数名詞の 1 格形および 4 格形 (*die Tag(e)*、*die Tier(e)*)、女性名詞 (*die Gab(e)*、*die Seel(e)*) において起こった。Rössler (2005) によると、名詞における語末音 *e* の欠落は 1530 年の時点で上部ドイツ文筆語において主要な異形であったが、1765 年の時点で急激に減少し、*e* 音が欠落しない形が主要な異形になった。

以上のことも踏まえて、前の章で言及した Rössler (2005) の調査した 24 の項目を以下に紹介する。その項目は、次の一覧表の形で集約することができる。

表 1 : Rössler (2005) における 24 の調査項目一覧

	東中部ドイツ語の異形	上部ドイツ語の異形
1	中高ドイツ語の <i>ei</i> を <i>ei</i> と綴る (例 : <i>Meister</i>)	中高ドイツ語の <i>ei</i> を <i>ai</i> と綴る (例 : <i>Maister</i>)
2	不定冠詞を <i>ein</i> と綴る	不定冠詞を <i>ain</i> と綴る
3	中高ドイツ語の <i>uo</i> を <i>u</i> 、 <i>üe</i> を <i>ü</i> で綴る (例 : <i>gut</i> 、 <i>brüder</i>)	中高ドイツ語の <i>uo</i> を <i>uo</i> 、 <i>üe</i> を <i>üe</i> で綴る (例 : <i>guot</i> 、 <i>brüeder</i>)
4	中高ドイツ語の <i>uo</i> を <i>u</i> で綴る (例 : <i>buch</i>)	中高ドイツ語の <i>uo</i> を <i>û</i> で綴る (例 : <i>bûch</i>)
5	中高ドイツ語の <i>ī</i> を <i>ie</i> と綴る (例 : <i>viel</i>)	中高ドイツ語の <i>ī</i> を <i>i</i> と綴る (例 : <i>vīl</i>)
6	鼻音の前において <i>o</i> を用いる (例 : <i>sonst</i>)	鼻音の前において <i>u</i> を用いる (例 : <i>sunst</i>)

7	中高ドイツ語の <i>k</i> を <i>k</i> , <i>ck</i> と綴る (例: <i>krank</i> , <i>erschrecklich</i>)	中高ドイツ語の <i>k</i> を <i>kh</i> , <i>ckh</i> と綴る (例: <i>khrank</i> , <i>erschreckhlich</i>)
8	語頭音を <i>b</i> で綴る (例: <i>bald</i>)	語頭音を <i>p</i> で綴る (例: <i>pald</i>)
9	否定の不変化詞を <i>nicht</i> と綴る	否定の不変化詞を <i>nit</i> と綴る
10	抽象名詞を形成する接尾辞を <i>-nis</i> と綴る (例: <i>Zeugnis</i>)	抽象名詞を形成する接尾辞を <i>-nus</i> と綴る (例: <i>Zeugnus</i>)
11	直説法現在 1・3 人称の <i>sein</i> 動詞を <i>sind</i> と綴る	直説法現在 1・3 人称の <i>sein</i> 動詞を <i>seind</i> (<i>seint</i>) と綴る
12	男性・中性単数 3 格の代名詞を <i>ihm</i> と綴る	男性・中性単数 3 格の代名詞を <i>ihme</i> と綴る
13	男性・中性単数 3 格の指示代名詞、関係代名詞、定冠詞を <i>dem</i> と綴る	男性・中性単数 3 格の指示代名詞、関係代名詞、定冠詞を <i>deme</i> と綴る
14	名詞における語末の <i>e</i> 音が欠落しない (例: <i>Hilfe</i>)	名詞における語末の <i>e</i> 音の欠落 (例: <i>Hilf</i>)
15	定冠詞付きの単数名詞に付加する形容詞が弱変化 (例: <i>der junge Herr</i>)	定冠詞付きの単数名詞に付加する形容詞が強変化 (例: <i>der junger Herr</i>)
16	定冠詞付きの複数名詞に付加する形容詞が弱変化 (例: <i>die besten Freunde</i>)	定冠詞付きの複数名詞に付加する形容詞が強変化 (例: <i>die beste Freunde</i>)
17	<i>-st-</i> の形で最上級を表す (例: <i>mindest</i> , <i>sicherst</i>)	<i>-ist-/ -est-</i> の形で最上級を表す (例: <i>mindist</i> , <i>sicherest</i>)
18	弱変化動詞の過去分詞の語尾に <i>-et</i> を用いる (例: <i>gezeigt</i>)	弱変化動詞の過去分詞の語尾に <i>-t</i> を用いる (例: <i>gezeigt</i>)
19	過去分詞の接頭辞に <i>ge-</i> を付加する (例: <i>ich bin gekommen</i>)	過去分詞の接頭辞に <i>ge-</i> を付加しない (例: <i>ich bin kommen</i>)
20	直説法現在形 3 人称単数の動詞語尾に <i>-et</i> を用いる (例: <i>er/sie/es lehret</i>)	直説法現在形 3 人称単数の動詞語尾に <i>-t</i> を用いる (例: <i>er/sie/es lehrt</i>)
21	直説法現在形 1 人称単数の動詞語尾に <i>-e</i> を用いる (例: <i>ich lobe</i>)	直説法現在形 1 人称単数の動詞語尾が付かない (例: <i>ich lob</i>)
22	<i>stehen</i> の接続法 II 式が <i>stünde</i> である	<i>stehen</i> の接続法 II 式が <i>stünd</i> である
23	<i>sehen</i> の直説法過去が <i>sahe</i> である	<i>sehen</i> の直説法過去が <i>sah</i> である
24	<i>reden</i> の命令法単数が <i>rede!</i> である	<i>reden</i> の命令法単数が <i>red!</i> である

4. 「標準化」に関する実証的パイロット調査

4.1. 調査方法

上で何度も参照した Rössler (2005) は、調査対象とした時代が 1765 年で終わっているため、Rössler (2005) に拠って 18 世紀の最後まで見渡すことも、19 世紀までの流れを展望することも残念ながらできない。そこで、本稿では、いくつかの

調査項目を例にして、18 世紀初めから 19 世紀前半までのオーストリアの文筆語における標準化の流れをひとつの同じ資料の分析によって実証的に追ってみたい。

本稿で資料とするのは、『ウィーン新聞』である。この新聞は、1703 年に *Wienerisches Diarium* という名前で発刊され、1780 年に *Wiener Zeitung* へと改名された。この新聞のテキストは、オーストリア国立図書館のオンラインアーカイブ ANNO (AustriaN Newspapers Online) から収集した。調査対象とした年は、1720 年、1750 年、1780 年、1810 年、1840 年である。このそれぞれの年について、各月 1 号ずつのテキストを収集対象とした。その結果、18 世紀で対象になったのは計 36 号 (3 年分×12 号) で、総語数は約 31 万語であり、19 世紀で対象になったのは計 24 号 (2 年分×12 号) で、総語数は約 88 万語である。これらのデータを、「ウィーン新聞データ 1720-1840」(「ウィーン新聞データ」と略) と呼ぶことにする。その内訳は、表 2 の通りである。

調査項目とするのは、抽象名詞を作る接尾辞の *-nus (-nuß)/ -nis (-niß)*、副詞・接頭辞の *zuruck/ zurück* である。この 2 つの項目を例にして、オーストリアの文筆語の「標準化」が 18 世紀から 19 世紀前半にかけてどのような進歩をしたのかを以下に見ていく。

表 2 : 「ウィーン新聞データ 1720-1840」の概要

年	号数	語数
1720 年	12	約 47,000 語
1750 年	12	約 86,000 語
1780 年	12	約 177,000 語
18 世紀データ合計	36	約 310,000 語
1810 年	12	約 529,000 語
1840 年	12	約 349,000 語
19 世紀データ合計	24	約 878,000 語

4.2. 接尾辞 *-nus (-nuß)/ -nis (-niß)*

接尾辞の *-nus, -nuß/ -nis, -niß* の場合、*-nus, -nuß* が上部ドイツ語的な異形、*-nis, -niß* が東中部ドイツ語的な異形、つまり結果的には標準形である。Rössler (2005) に

よれば、「16世紀から18世紀前半にかけて、オーストリアおよびバイエルンの印刷物において抽象概念を表す接尾辞が現れたときには、その地域に昔からあった上部ドイツ文筆語の異形である *-nuß* もしくは *-nus* がほとんどもっぱら見られた」(Rössler 2005: 205) が、「上部ドイツ語の *u* から東中部ドイツ語の *i* への交替は、オーストリアの印刷物においては18世紀の中葉を切れ目として起こった」(Rössler 2005: 208)。

*-nus, -nuß/ -nis, -niß*に関する本稿のパイロット調査の結果⁴⁾は、次の通りである。それぞれの異形は、「ウィーン新聞データ」において各時期に次の表3にあるような頻度で出現している。

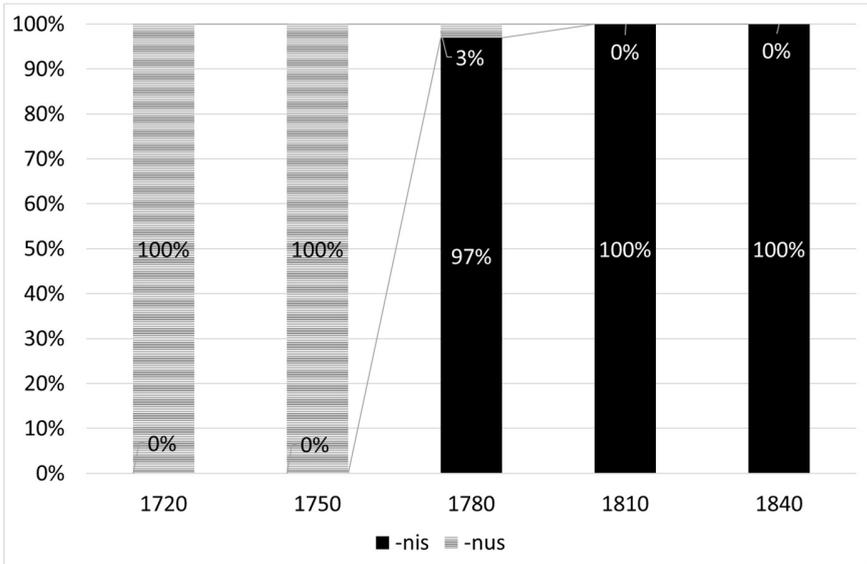
表3を見てみると、*-nus, -nuß* は時間が経つにつれて減少しているのに対して、*-nis, -niß* は増加していることがわかる。さらにここで、*-nus, -nuß* と *-nis, -niß* の競合関係をグラフの形で示しておこう。

図2では、灰色の部分は上部ドイツ語的異形 *-nus, -nuß* の割合、黒色の部分は東中部ドイツ語的異形 *-nis, -niß* の割合を示している。まず灰色の部分の *-nus, -nuß* は、*-nis, -niß* との競合関係において、1750年から1780年の間にほぼ消滅している。つまり、1750年から1780年の間に、黒い部分の東中部ドイツ語的異形 *-nis, -niß* が、*-nus, -nuß* に取って代わって、主要形となり、標準化を完了したので

表3: *-nus, -nuß* および *-nis, -niß* の調査結果

	出現回数				
	1720	1750	1780	1810	1840
<i>-nus, -nuß</i>	36	15	4	0	0
<i>-nis, -niß</i>	0	0	125	239	729
総語数	約 47,000	約 86,000	約 177,000	約 529,000	約 349,000

4) *-nus* という異形としては、*Bedingnussen* (1750年3月4日号) のように *-nus* のほかに *-nussen* という語形が見られたが、*-nuß* の場合には、*-nuß* (*Geheimnuß*: 1720年3月2日) という語形のみが見られた。*-nis* の場合には、*Gefängnisse* (1780年5月3日)、*Ereignisses* (1810年8月1日)、*Bedingnissen* (1810年1月3日) のように *-nis* のほかに、*-nisse, -nisses, -nissen* という語形が見られ、*-niß* の場合には、*Erfordernißen* (1780年9月2日) のように、*-niß* のほかに、*-nißen* という語形が見られた。なお、上部ドイツ語のさらなる異形としては、*u* ウムラウトの *nüs/ niuß* もあり得る。今回のコーパスでも実際1750年に *Verständniuß* (1750年12月2日) が1件見いだが、これ以上はなかったため、今回は *-nus, -nuß* と *-nis, -niß* を比較することにする。

図 2 : *-nus, -niß* および *-nis, -niß* の競合関係

ある。

4.3. 副詞・接頭辞 *zuruck/zurück*

次に、副詞・接頭辞の *zuruck/zurück* について見てみよう。*zuruck/zurück* の場合、ウムラウトしていない *zuruck* が上部ドイツ語的異形、ウムラウトした *zurück* が東中部ドイツ語的異形、つまり標準形である。Wiesinger (2014³) は、上部ドイツの文筆語の特徴のひとつとして、「*zuruck, Stuck, Bruck, drucken, Lug, lügen, Burger, Burgermeister* [...] のように、*g, ck, r* + 子音の前における *u* の非ウムラウト化 [...] は、1750 年まで維持された」(Wiesinger 2014³: 307) と述べている。

zuruck/zurück に関する本稿のパイロット調査の結果⁵⁾は、次の表 4 の通りである。

5) *u* ウムラウトしていない異形 *zuruck* の例としては、例えば *Zuruckunft* (1720 年 12 月 4 日) や *zuruck genommen* (1750 年 10 月 3 日) がある。一方、ウムラウトした異形 *zurück* の例としては、*zurückkommen* (1780 年 3 月 1 日) や *zurückkehrten* (1810 年 6 月 2 日) がある。

表 4 : *zuruck* および *zurück* の調査結果

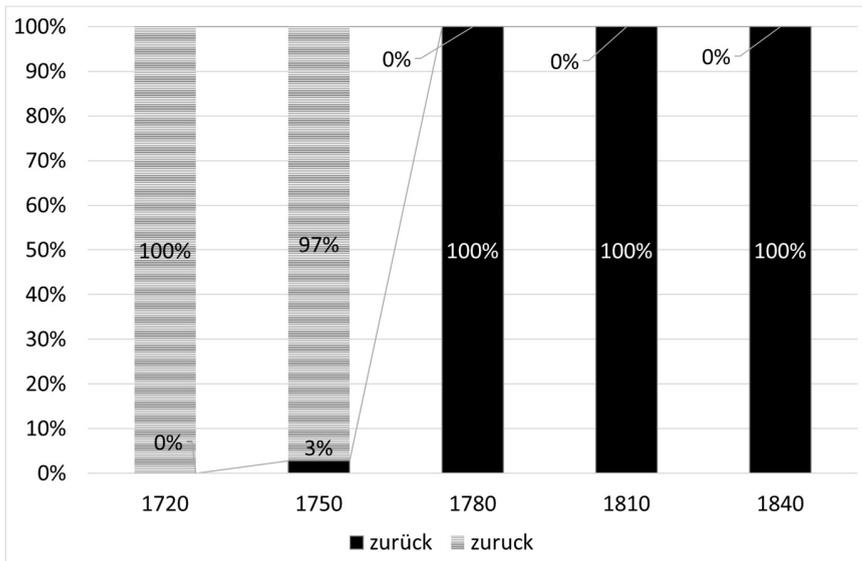
	出現回数				
	1720	1750	1780	1810	1840
<i>zuruck</i>	13	35	0	0	0
<i>zurück</i>	0	1	71	71	189
総語数	約 47,000	約 86,000	約 177,000	約 529,000	約 349,000

zuruck/*zurück* の調査でも、先ほどの *-nus*, *-nuß*/*-nis*, *-niß* の結果同様に、上部ドイツ語の異形は時間が経つにつれて減少しているのに対して、東中部ドイツ語の異形 *zurück* は増加していることが分かる。*zuruck*/*zurück* の競合関係をグラフの形で示しておこう。

図 3 では、灰色の部分では上部ドイツ語的異形 *zuruck* の割合、黒色の部分は東中部ドイツ語的異形 *zurück* の割合を示している。上部ドイツ語的異形は、1750 年から 1780 年の間に消滅している。つまり、1750 年から 1780 年の間に、東中部ドイツ語的異形が、上部ドイツ語の異形に取って代わって、主要形となり標準化を完了した。

以上、2つの項目に関するパイロット調査から、次の重要なことが判明する。

図 3 : *zuruck* および *zurück* の競合関係



上部ドイツ語的な *-nus, -nuß* から東中部ドイツ語的な *-nis, -niß* への交替は、オーストリアの印刷物においては「18 世紀の中葉を切れ目として起こった」(Rössler 2005: 208) と Rössler (2005) が述べ、また *zuruck/ zurück* に関して上部ドイツ語的異形が「1750 年まで維持された」(Wiesinger 2014³: 307) と Wiesinger (2014³) が指摘しているが、その異形の交替は「ウィーン新聞データ」に基づく限りにおいては 1750 年から 1780 年の間に起こったのである。つまり、1750 年よりも前ではなく、1750 年よりもあとに異形の交替が始まり、1780 年までの 20-30 年の間に上部ドイツ語的異形が東中部ドイツ語的異形へそっくり入れ替わり、標準化が急激に進んだと見える。この 1750 年から 1780 年の間に、なにがあったのであろうか。

5. テレジアの学校改革とゴットシェートの文法書

5.1. オーストリアの学校改革

この 18 世紀中葉に、オーストリアではある社会文化的・政治的状況の変化が起こっている。それは、学校改革である。これが、この時期におけるオーストリアの文筆語の急激な標準化と関連している可能性がある。

オーストリアでは 18 世紀前半にすでに、「ドイツ語学校」と呼ばれた初等教育が、「主要都市ばかりだけでなく、すべての教区、さらに支部協会の所在地」(山之内 2006: 273-274) でも行われていた。しかし、この「ドイツ語学校」で重点が置かれていたのは、ドイツ語ではなかった。Helfert (1860) には、当時の教員の選考基準について次のような記述がある。

[...] 教員志願者が、多少ともパイプオルガン演奏に熟練し、巡礼や行列の際に前唱を務めて響きわたる低音の声を出すことができ、また雷雨を熟知していて、雷雨を何時間も前に察知し、鐘を鳴らすことで機を逸することなく雷雨に対処できるという評判が、教職採用の際に有利になる特性であった。(Helfert 1860: 60)

18 世紀前半の「ドイツ語学校」は国家によって主導されたものではなく、教会により運営されていたのである。「当時、ほとんどの地域で教区教会によって掌握され、教師のポストはたいがい、教会使用人を兼ねていた」(山之内 2006: 274)。それゆえ、その学校の教師に求められる最重要の技能が、学校の名前に反

してドイツ語でなかったことは必然的とも言える。

このような教育環境を大きく変えるきっかけを与えたのが、マリア・テレジア (Maria Theresia, 在位：1740-1780年) である。テレジアは、広い社会層における教育の不在と人材の欠如を痛感し、「〈学校制度は政治的に重要な問題であり、そして政治的に重要な問題であり続ける (Das Schulwesen ist und bleibt ein Politikum) 〉」という言葉のもと、改革の一つに学校授業の改革を入れる必要性を述べた (Csendes/ Opll 2003: 392)。テレジアの学校改革 (Theresianische Schulreform) とは、「18世紀半ば以降に初等教育を教会の影響圏から徐々に解放することにつながり、オーストリアにおける学校制度を統一的に整備した諸処置」(Czeike 1997: 445) のことを指し、この学校改革は「最終的には1774年12月6日に帝国民学校令が初めて公布されたときに頂点に達した」(Czeike 1997: 445)。学校改革ではまず、教育全般におけるイエズス会とウィーン大司教の強大な影響力を排除する目的で、「これまでウィーン大学に認められてきた高等教育の監督権が廃止され、1760年には、独自の政府機関、宮廷教育委員会が設置されて、この権限を引き継ぐことになった」(山之内 2006: 278-279)。これが、テレジアの「学校制度は政治的に重要な問題であり、そうあり続ける」という考えを貴族の教育に限らず、国内全土において実現する第一歩となった。その後1770年には、ニーダーエスタライヒ学校委員会が設置された。教会が学校を管理および運営するという従来の構造とは異なり、「俗人を中心に組織され、オーストリア全土における「ドイツ語学校」の統監を主たる任務としたこの委員会は、同時に教員養成機関の設立を視野におき、早くも1771年、首都において第一号の師範学校開設を達成した」(山之内 2006: 279)。

その効果があって、オーストリアの教育状況は19世紀半ばには、次の引用文に書かれているように、プロイセンに追いつくほどになっていた。

プロシアでは一八五〇年代の終り頃に学齢期児童の九一%が就学していたが、同時期のオーストリアはこれと同じ水準、いやそれどころか、もっと高い水準に達していた。ザルツブルグではもう学校欠席者がいなくなっていたし、エンツ河の上流地方と下流地方でも欠席者は皆無に近く、シュタイアマルクでは児童の八七%、ケルンテンでは八二%が就学していた。時によるとオーストリアのほ

うが英才の育成という面では北ドイツよりも優れていることがあった。(エンゲルジング 1985: 185)

5.2. ゴットシェートの文法書の受容

啓蒙主義の影響により、オーストリアでは 1750 年頃から言語規範に関する議論が活発になった。その際に受容されたのが、ドイツ東中部の中核的な都市であるライプツィヒで活躍していたゴットシェート (Johann Christoph Gottsched, 1700-1766) の著作であった (Rössler 2005: 16-17 参照)。啓蒙主義の文学理論家としても権威のあったゴットシェートは、『ドイツ語文法の基礎付け (Grundlegung einer deutschen Sprachkunst)』(1748 年) 等のさまざまな著述を通じて東中部ドイツ文章語への標準化を推し進めた (高田・新田 2013: 29)。『ドイツ語文法の基礎付け』は、初版刊行の翌年となる 1749 年にすでにオーストリアで広く知られており、「君主国全土から来る若い貴族の養成所として」(Wiesinger 2014³: 332) 1746 年にテレジア自身によって設立された教育機関であるウィーンのアム・テレジアヌム (Theresianum) では、テレジアの命により彼の文法書『ドイツ語文法の基礎』が教科書として使われた (Faulstich 2008: 118 参照)。Wiesinger (2014³) によれば、1750 年にテレジアヌムにドイツ語雄弁術の講座が設置され、フォン・ユスティ (Johann Heinrich Gottlob von Justi, 1720-1771) が教員として招聘され、ゴットシェートの『ドイツ語文法の基礎付け』が教科書として導入されたことをもって、「自国の上部ドイツ語的文章語から東中部ドイツ文章語へと交替する決定的なステップ」(Wiesinger 2014³: 342) となった。ユスティは、テューリンゲン出身で、「ゴットシェートに近い」(Wiesinger 2014³: 424) 人物であった。テレジアが貴族の養成所において、ゴットシェート文法を受容する流れを作ったということは、テレジアが旧来からオーストリアで使われていた上部ドイツ語の文筆語を模範的な言語変種とは見なさず、東中部ドイツ語の文筆語を言語模範とみなしたことを明確に表しており、テレジアは東中部ドイツ語の文筆語を正しく使える能力を将来の官僚候補である貴族および教養層に求めたのである。

テレジアは、ゴットシェート派のユスティをテレジアヌムの教授職に就任させたあと、続けて初等教育においてもゴットシェート文法の影響を受けた人物たちを要職に就かせた。その人物のひとりが、帝国内出身の言語学者として初めて

ウィーン大学の教授となったポポヴィッチ (Johann Siegmund Valentin Popowitsch, 1705-1774) である。ポポヴィッチはテレジアの委託を受けて、学校文法を編纂した。それは、1754年に出版された文法書『ドイツ語文法の最重要の初歩 (Nothwendigste Anfangsgründe der Deutschen Sprachkunst)』である。

ポポヴィッチは、ウィーンの啓蒙領主司教のトラウトソン伯爵の勧めにより、ウィーン大学に招聘され、1753年からはウィーン大学に新設された「ドイツ語雄弁術」の講座の教授職に就いた。また同時に彼は、ウィーンのリプツィヒ・アカデミーで同様のポストへの招聘を受け、1753年から1766年までその職に就いた。彼は、女帝マリア・テレジアよりドイツ語の学校文法書を編纂するよう委託を受ける。(Faulstich 2008: 126)

Reiffenstein (2000) は、この文法書について次のように記述している。

しかし、ポポヴィッチの『ドイツ語文法の最重要の初歩』(1754年)において規範化された標準語は、すでに実質上大部分においてライプツィヒの規範と一致していた。このことが必然的に、[17] 70年代および80年代に、ゴットシェート、そしてとりわけアーデルングの教科書が集中的に受容されることにつながった。これらの教科書の受容は、19世紀まで持続したが、それはとりわけそれらの教科書の翻刻版がウィーンで(例えば Trattner や Kurzböck といった出版社により) 数多く出されたことのおかげであった。(Reiffenstein 2000: 296)

さらにテレジアは1774年1月に、「かつての宿敵であるプロイセン王フリードリヒ2世に書簡を送り、ひとりの聖職者をオーストリアに派遣するための認可を乞うた」(山之内 2006: 279)。その宿敵に頭を下げてでも手に入れたかった人材は、シュレーゲン出身のフォン・フェルビガー (Johann Ignaz von Felbiger, 1724-1788) である。テレジアの願いが受け入れられ、フェルビガーはオーストリアに赴いて学校制度改革を任されることとなった (Faulstich 2008: 138 参照)。フェルビガーは一般学校教育法の作成など学校改革に携わる一方、1763-1785年の間に少なくとも47の教育書および教科書を出版した (Rössler 1995: 55 参照)。その著

書としては、次の一連の匿名で出版されたものがある：Felbiger (1774a)『アルファベットあるいは姓名についての入門 (ABC oder Namenbüchlein)』、Felbiger (1774b)『ドイツ語正書法についての手引書 (Anleitung zur deutschen Rechtschreibung)』、Felbiger (1775a)『ドイツ語文法についての手引書 (Anleitung zur deutschen Sprachlehre)』、Felbiger (1775b)『書簡およびその他の作文における書き方についての手引書 (Anleitung zur deutschen Schreibart in Briefen, und einigen andern Aufsätzen)』。これらの本には、「帝国および王国のドイツ語学校用 (Zum Gebrauche der deutschen Schulen in den kaiserlich-königlichen Staaten.⁶⁾」と記載がある。つまりフェルビガーは、初等学校のドイツ語教育に対して法律というハードの面だけでなく、教科書というソフトの面でも影響力を持っていたのである。

Rössler (1995) によると、フェルビガーのドイツ語文法書もまた、ゴットシェートの伝統を引き継ぐようなものであった。

18 世紀後半にオーストリアで出版された文法書と大きく比較してみると、ヨハン・イグナーツ・フォン・フェルビガーの言語の規範化に関わる著作は、彼の生きた時代において目新しいものではないことがわかる。それどころか彼は、ヨハン・クリストフ・ゴットシェートに始まる言語改革の伝統のなかにあり、オーストリアで文法書を出版した啓蒙主義的で言語改革の念に満ちた同時代人と異なる点は、せいぜい以下のことである。それは、ドイツ語文章語の形態論に関するライプツィヒの言語学教授 [=ゴットシェート] の主張を誰よりも正確に受け入れ、標準語のなかに見られる上部ドイツ語的な要素については誰よりも言及を避けたことである。(Rössler 1995: 70-71)

このようにして 1750 年から 1780 年の間に、東中部ドイツ語の文筆語を言語規範とするゴットシェートの文法書（およびその影響下にある文法書）がオーストリアの初等教育において受け入れられ、確固たるものとなった。このことが、本稿のパイロット調査により判明した、1750 年から 1780 年の間における『ウィー

6) Felbiger (1775b) は „Zum Gebrauche für Schüler der deutschen Schulen in den kaiserlich-königlichen Erblanden“ となっていて他の 3 冊と正確には表現に違いがあるが、実質的な意味は変わらない。

ン新聞』における2つの言語項目の大きな変化と関連している可能性がある。

『ウィーン新聞』の書き手たちは、東中部ドイツ語の異形が正しいという言語規範意識を1750年以降に着実に持ち始めたという解釈がありうる。

5.3. 言語規範意識から見た *zurücke* という異形

上の4.3.で行った *zuruck/zurück* の調査において、一つ興味深い例が見つかった。それは、*zurück* に *e* が付加された *zurücke* という異形である。「ウィーン新聞データ」において、*führen ... zurücke* (1750年8月1日) という例が1件見られた。オンラインアーカイブの ANNO で1720, 1750, 1780, 1810, 1840年の全ての号の新聞を対象に検索したところ、この *zurücke* がさらに数件使用されていることが確認できた。次の表5が、その検索結果である。

表5: *zurucke* および *zurücke* の調査結果

	1720	1750	1780	1810	1840
<i>zurucke</i>	0	0	0	0	0
<i>zurücke</i>	0	7	3	0	0

この表5でわかるように、1750年と1780年に *zurücke* はわずかではあるが確認することができた一方で、*zurucke* という語形はまったく確認することができなかった。*zurücke* が存在し、*zurucke* が存在しないのはなぜだろうか。ここで、一つの仮説を示したい。1750年と1780年の『ウィーン新聞』に *zurücke* があるのは、全般的に語末音 *e* を付加するのが正しいという規範意識を新聞の書き手が抱いていたために起きた現象なのではないだろうか。ゴットシェートは文法書の中で、*„die Lieb“* (Gottsched 1748: 170) のような女性名詞単数、*„im (d. i. in dem) Tode“* (Gottsched 1748: 438) のような男性および中性名詞における3格形、*„die Hände“* (Gottsched 1748: 188) のような複数名詞における *e* 音欠落を批判している。つまり、ウィーン新聞の書き手たちは、上部ドイツ語では脱落しがちな語尾音 *e* に関しては東中部ドイツ語風に付加するのが正しいという意識をもったために、なくて構わない *e* を付加してしまったという解釈である。このことの証左として、この *e* がついた語形は、ウムラウトなしの上部ドイツ的な語形 *zuruck* にで

はなく、ウムラウトした東中部ドイツ的な語形 *zurück* のほうにのみ見られることを挙げられるかもしれない。Wiesinger (2014³: 309) によると、東中部ドイツ語の文筆語から複数名詞の語尾 *e* 音が入り始めた 1550 年以降に、上部ドイツ語の文筆語において強変化動詞単数 1 人称および 3 人称の過去形で *er ware*, *er sahe*, *er nahme* のように *-e* 音を過剰に付加する現象が起こった。さらに同様の理由から、上部ドイツ語の文筆語において人称代名詞 *ihm* を *ihme*、副詞では *nachdeme*, *indeme* と記されることがあった。これらのことから、語末の *e* 音を落とすことが上部ドイツ語の特徴となるので、それを避けようという意識が『ウィーン新聞』の書き手たちにあったのかもしれない。

6. 結び

本稿ではまず、16 世紀から 18 世紀のオーストリアにおける文筆語を取り巻く環境、および上部ドイツ文筆語の特徴を概観した。その上で、接尾辞 *-nus (-nuß)/-nis (-niß)*、副詞・接頭辞 *zuruck/ zurück* を例にして、18 世紀初めから 19 世紀前半までのオーストリアにおける標準化、つまり上部ドイツ語の文筆語から東中部ドイツ語型の新高ドイツ語文章語へ交替する流れを『ウィーン新聞』をデータとして調査した。その結果、1750 年から 1780 年にかけて急激な標準化が生じていることがわかった。そのことが 18 世紀中葉以降のマリア・テレジアによる学校改革と関連しているのではないかと筆者は考える。

宗派的に対立していた東中部ドイツの文章語を学校教育に取り入れ、政治的に対立していたプロイセンの聖職者を初等教育改革の重要人物として招聘するというテレジアの姿は、一見矛盾に満ちている。神聖ローマ皇帝の官房語に基盤を置いた文筆語としての誇りを捨てず、上部ドイツ語の文筆語に固執することもできたはずである。しかし、16 世紀からは宗教改革において、18 世紀からは啓蒙主義において東中部ドイツが強い影響力を持つ地域になったこと、そしてプロイセンが軍事力を付け大国への道を進んでいるという状況で、テレジアは政治社会のおよび経済的観点から有利と言える選択肢、つまり東中部ドイツ語型の高地ドイツ語文章語を選んだ。Haugen (1987) が提唱した 4 段階からなる言語計画に関するモデルと重ねて考えると、テレジアは、第一段階である「選定 (selection)」において東中部ドイツ語型の高地ドイツ語文章語を模範に選び、第二段階の「成文

化 (codification)」ではゴットシェートに依拠した文法書を編纂させ、その文法書をもとに第三段階の「実施 (implementation)」、つまり教育における普及まで行うという言語計画の推進者であったと言える。

参考文献

一次文献

ANNO -AustriaN Newspapers Online: <http://anno.onb.ac.at/>

(1720年の新聞: 2017年7月25日閲覧、1750, 1780年: 2017年7月26日閲覧、
1810年: 2018年1月20日閲覧、1840年: 2018年1月21日閲覧)

Felbiger (1774a): *ABC oder Namenbüchlein zum Gebrauche der Schulen in den kaiserlich-königlichen Staaten*. Wien: Deutsche Schulanstalt.

[Felbiger, Johann Ignaz von] (1774b): *Anleitung zur deutschen Rechtschreibung. Zum Gebrauche der deutschen Schulen in den kaiserlich-königlichen Staaten*. Wien: Deutsche Schulanstalt.

[Felbiger, Johann Ignaz von] (1775a): *Anleitung zur deutschen Sprachlehre. Zum Gebrauche der deutschen Schulen in den kaiserlich-königlichen Staaten*. Wien: Deutsche Schulanstalt.

Felbiger (1775b): *Anleitung zur deutschen Schreibart in Briefen, und einigen andern Aufsätzen. Zum Gebrauche für Schüler der deutschen Schulen in den kaiserlich-königlichen Erblanden*. Wien: Deutsche Schulanstalt.

Gottsched, Johann Christoph (1748): *Grundlegung einer Deutschen Sprachkunst*. Leipzig: Breitkopf.

Popowitsch (1754): *Die nothwendigsten Anfangsgründen der Teutschen Sprachkunst zum Gebrauche der Österreichischen Schulen auf allerhöchsten Befehl ausgefertigt*. Wien: Zwey Brüdern Grundt.

二次文献

Besch, Werner (2012): *Grimmelshausens ‚Simplicissimus‘ — Das zweite Leben eines Klassikers*. Paderborn/ München/ Wien/ Zürich: Schöningh.

Csendes, Peter/ Ferdinand Oppl (Hrsg.) (2003): *Wien. Geschichte einer Stadt. Band 2: Die*

- frühneuzeitliche Residenz. (16. bis 18. Jahrhundert)*. Wien/ Köln, Weimar: Böhlau.
- Czeike, Felix (1997): *Historisches Lexikon Wien: in 5 Bänden*. Band 5: Ru-Z. Wien: Kremayr & Scheriau.
- Engelsing, Rolf (1973): *Analphabetentum und Lektüre. Zur Sozialgeschichte des Lesens in Deutschland zwischen feudaler und industrieller Gesellschaft*. Stuttgart: Metzler.
- エンゲルジング、ロルフ [中川勇治訳] (1985)『文盲と読書の社会史』思索社。
- Faulstich, Katja (2008): *Konzepte des Hochdeutschen. Der Sprachnormierungsdiskurs im 18. Jahrhundert*. Berlin/ New York: Walter de Gruyter.
- Haugen, Einar (1987): Language planning. In: Ulrich Ammon, Norbert Dittmar & Klaus Mattheier (eds.) *Sociolinguistics/ Soziolinguistik: An international handbook of the science of language and society*, 626-637. Berlin: Walter de Gruyter.
- Helfert, Joseph Alexander Freiherr von (1860): *Die österreichische Volksschule. Geschichte System Statistik. Erster Band. Die Gründung der österreichischen Volksschule durch Maria Theresia*. Prag: Friedrich Tempsky.
- Reiffenstein, Ingo (2000): Deutsch in Österreich vom 18. bis ins 20. Jahrhundert. Das problematische Verhältnis von Sprache und Nation. In: Langewiesche, Dieter/ Georg Schmidt (Hrsg.): *Föderative Nation. Deutschlandkonzepte von der Reformation bis zum Ersten Weltkrieg*, 293-305. München: R. Oldenbourg.
- Reiffenstein, Ingo (2003a): Aspekte einer Sprachgeschichte des Bayerisch-Österreichischen bis zum Beginn der frühen Neuzeit. In: *Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft*. Band 2.3, 2 Auflage, 2889-2942. Berlin/ New York: Walter de Gruyter.
- Reiffenstein, Ingo (2003b): Aspekte einer Sprachgeschichte des Bayerisch-Österreichischen bis zum Beginn der frühen Neuzeit. In: *Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft*. Band 2.3, 2 Auflage, 2942-2971. Berlin/ New York: Walter de Gruyter.
- Rössler, Paul (1995): Sprache zur Erziehung – Erziehung zur Sprache. Felbigers Grammatiken und die schriftsprachliche Reform in Österreich in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts. In: *Das achtzehnte Jahrhundert und Österreich. Jahrbuch der österreichischen Gesellschaft zur Erforschung des achtzehnten Jahrhunderts*. Band

10. Wien: WUV-Universitätsverlag, 55-72.

Rössler, Paul (2005): *Schreibvariation – Sprachregion – Konfession. Graphematik und Morphologie in österreichischen und bayerischen Drucken vom 16. bis ins 18. Jahrhundert*. Frankfurt a. M.: Peter Lang.

高田博行・新田春夫（編）（2013）『講座ドイツ語言語学 第2巻 ドイツ語の歴史論』ひつじ書房。

Wiesinger, Peter (2000): Die Entwicklung der deutschen Schriftsprache vom 16. bis 18. Jahrhundert unter dem Einfluß der Konfessionen. In: 『ドイツ語圏研究』, 上智大学ドイツ語圏文化研究所, 17, 1-15 ページ.

Wiesinger, Peter (2003): Aspekte einer österreichischen Sprachgeschichte der Neuzeit. In: *Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft*. Band 2.3, 2 Auflage, 2971-3001. Berlin/ New York: Walter de Gruyter.

Wiesinger, Peter (2006¹, 2008², 2014³): *Das österreichische Deutsch in Gegenwart und Geschichte*. Wien/ Berlin: LIT.

山之内克子（2006）「啓蒙期オーストリアにおける教育—初等学校の制度的変遷を中心に」、浅野啓子・佐久間弘展（編）『教育の社会史』知泉書館、271-291 ページ。

（くじらおか・さつき： 学習院大学人文科学研究科博士後期課程）

Zur Standardisierung der österreichischen Schreibsprache in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts

Was die Schulreform von Maria Theresia brachte

Satsuki Kujiraoka

Der vorliegende Beitrag ist ein Überblick über die Geschichte der österreichischen Schriftsprache vom 16. bis 18. Jahrhundert. Fokussiert werden dabei Merkmale des geschriebenen Oberdeutschen dieser Epoche. In einer Pilotuntersuchung wird eruiert, wie sich die Standardisierung der österreichischen Schriftsprache, d. h. der Übergang zur hochdeutschen Schriftsprache ostmitteldeutschen Typs, gegen Ende dieser Epoche vollzogen hat. Dieser Befund wird dann schließlich darauf hin erwogen, ob und in welchen Aspekten er sich mit der Schulreform Kaiserin Maria Theresias (reg. 1740-1780) in Zusammenhang steht.

Vom 16. bis zum 18. Jh. konkurrierten zwei Sprachvarietäten um den Status der einheitlichen neuhochdeutschen Schriftsprache miteinander: eine ist die ostmitteldeutsche und die andere die oberdeutsche Varietät. Der Status der auf der Kanzleisprache Kaiser Maximilians I. (reg. 1493-1519) basierenden oberdeutschen Schriftsprache wurde in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts dadurch geschwächt, dass die ostmitteldeutsche Schriftsprache infolge der Reformation zunehmend an normierendem Einfluss gewonnen hat. Die zunächst in Österreich weit verbreitete Reformation wurde anschließend zurückgedrängt, indem die meisten Regionen Österreichs im Zug der Gegenreformation zu Beginn des 17. Jahrhunderts rekatholisiert wurden. Damit ging einher, dass die autochthone oberdeutsche Schriftsprache in dieser Zeit wieder als Vorbild gelten konnte. Die Renaissance der oberdeutsch-autochthonen Schriftvarietät war jedoch von kurzer Dauer. Bis zur Mitte des 18. Jahrhunderts vollzog sich im oberdeutschen Raum schließlich jener Prozess schriftsprachlicher Standardisierung, der zur Annahme der hochdeutschen Schriftsprache ostmitteldeutschen Typs führte.

Charakteristische Kennzeichen bzw. Varianten der oberdeutschen Schriftsprache vom 16. bis 18. Jahrhundert im Vokalismus, Konsonantismus und der Morphologie lassen sich wie folgt zusammenfassen. Im Vokalismus: (1) Umlautlosigkeit von u vor g, ck sowie au vor g, b, m (z. B. zuruck, versaumen), (2) mhd. î/ ei, ie/ ī und uo/ ū werden mit ei/ ai, ie/ i und ue/ u geschrieben (z. B. Zeit/ brait, lieben/ vil, genueg./tugend), (3) mhd. u/ ü vor Nasalen werden gegen die Senkung von u/ ü zu o/ ö bewahrt (z. B. sunst, müglich). Im Konsonantismus: (1) Konsonantenverdoppelung auf Frikative und Konsonanten m, n, l (z. B. schlaffen, nemmen, vnnndt, zallen), (2) kh und ckh für k und ck (z. B. khern, gelenckh). In der Morphologie: (1) das Abstraktsuffix -nus für -nis (z. B. Gleichnus, Bildnus), (2) die e-Apokope beim starken maskulinen und neutralen Dativ Sg. (z. B. an dem Tag(e)), beim Nominativ und Akkusativ Plur. (z. B. die Tag(e)) sowie bei den Feminina (z. B. die Gab(e)).

Anhand der zwei oberdeutsch-ostmitteldeutschen Variantenpaare Abstraktsuffix -nus (-nuß) versus -nis (-niß) sowie Adverbien/Präfixe zuruck versus zurück wird im vorliegenden Beitrag eine Pilotuntersuchung auf der Grundlage von Textdaten der „Wiener Zeitung“ vorgenommen. Zu diesem Zweck hat die Verf. ein „Wiener-Zeitung-Korpus 1720-1840“ zusammengestellt, das aus Daten der Erscheinungsjahre 1720, 1750, 1780, 1810 und 1840 besteht und knapp 1.2 Millionen Wörter umfasst. Diese Studie hat ergeben, dass der Wechsel zu den ostmitteldeutschen Varianten, also von -nus (-nuß) zu -nis (-niß) sowie von zuruck zu zurück in der Wiener Zeitung zwischen 1750 und 1780 rapide erfolgte, nachdem die autochthonen oberdeutschen Varianten zwischen 1720 und 1750 noch dominierten. Die Ergebnisse stimmen mit den Beschreibungen von Rössler (2005) und Wiesinger (20143) überein und erweitern teilweise deren Untersuchungszeiträume. So hat sich in der vorliegenden Untersuchung herausgestellt, dass die herkömmlichen oberdeutschen Varianten in den Jahren 1810 und 1840 aus der „Wiener Zeitung“ fast vollständig ausgeschlossen waren.

Die rasche Standardisierung bei den analysierten Merkmalen in den Jahren zwischen 1750 und 1780 ließe sich auf die Schulreform Kaiserin Maria Theresias (reg. 1740 bis 1780) beziehen. Die ostmitteldeutsch orientierte Grammatik von Johann Christoph Gottsched (1748) wurde in die „Theresianische Akademie“ eingeführt. Etwas später folgte eine Reihe von Sprachlehrbüchern von Johann Ignaz von Felbiger, die die ostmitteldeutsche

Schriftsprache zum Vorbild nahmen und in den österreichischen Schulen verwendet wurden. Diese sprachpolitischen Entscheidungen korrelieren mit der Präferenz der ostmitteldeutschen Varianten in der „Wiener Zeitung“.

In Anlehnung an die Terminologie von Haugen (1987) lassen sich die Maßnahmen von Maria Theresia in den Kontext einer Sprachplanung einbetten, bei der die „Selektion“ der ostmitteldeutschen schriftsprachlichen Varianten, die „Kodifikation“ der sprachlichen Norm durch die Herausgabe einer Reihe von Sprachlehrbüchern vornehmlich nach Gottscheds Ausrichtung und ihre „Umsetzung (Implementation)“ im Bereich der schulischen Erziehung stattfanden.

